2018 年 12 月 8 日　前橋聖書フォーラム

御国の福音

第 11 回：ダニエル書と御国の計画[1]

目次

はじめに　p. 2

I.　4 つの異邦人帝国と神の主権（１）（2 章）　p. 3
II.　4 つの異邦人帝国と神の主権（２）（7 章）　p. 6
III. 反キリストの「型」：アンティオコス 4 世（8、11 章）　p. 10
IV. 患難期と死者の復活（12:1–3）　p. 11
V. 回復までのプログラム（9:24–27）　p. 12

ダニエル書における御国の計画のまとめ　p. 13

はじめに

A. 前回までの復習

1. 「神の御国／王国」（the kingdom of God）の計画について学んでいる。御国の計画は、聖書を貫く軸である。

2. イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書から、イスラエルの回復が、御国の計画と密接に関係していることを学んだ。
   (1) イスラエルは不信仰により裁かれる。
   (2) 神はイスラエルと諸国民を罪のゆえに裁かれる。その裁きは、「主（ヤハウェ）の日」と呼ばれる世界大の苦難の時をもたらす。
   (3) 裁きの後、王なるメシアが来られ、神の王国が地上に建てられる。メシアは再建されたエルサレムから世界を統べ治める。
   (4) メシアによって、イスラエルは霊的・物質的に回復させられる。
   (5) イスラエルは、諸国民を祝福する「祭司の王国」としての役目を果たす。その結果、諸国民もまたメシアの王国において祝福される。

B. ダニエル書について

1. ダニエルについて
   (1) 紀元前 605 年にバビロンに連行され、ネブカドネツァル王の下に召し出された。
   (2) ダニエル書の最後の記録（10–12 章）は、ペルシャのキュロス王の第 3 年（紀元前 537 年）に与えられた幻に関するものである。
   (3) ダニエルは、少なくとも約 70 年（仮に 15 歳で捕囚されたとすると、約 80 歳になるまで）、バビロンおよびペルシャの王に仕えた。

2. ダニエル書のポイント[2]
   (1) <u>異邦人帝国による統治</u>
   神の御国がもたらされるまで、地上では異邦人の諸王国による支配が続く。この支配は、反キリストの登場によって頂点に達する。
   (2) <u>神の主権</u>
   地上の異邦人王国の興亡さえも、神の御手の中にある。究極的な主権者は、イスラエルの神ヤハウェである。

(3) 御国の希望

異邦人王国の支配下で、イスラエルは苦難を通過する。最後の異邦人王国（反キリストの王国）では、苦難が特に激しくなる。しかし、神は最終的にその帝国を滅ぼし、メシアを王とする御国を地上にお建てになる。

3. 本講義について

(1) ダニエル書における終末預言を、ほとんどすべて要約したい。中でも重要な 2 章および 7 章については、他の章よりも詳しく解説したい。

(2) 特に重要である 9 章については、次回「後編」で詳しく取り上げる。

I. 4 つの異邦人帝国と神の王国（1）（2 章）

A. ネブカドネツァル王の夢

1. 巨大な像の夢

(1) 新バビロニア帝国のネブカドネツァル王は、「一つの巨大な像」が「一つの石」によって打ち砕かれ、その石が「大きな山となって」全世界を覆ったという夢を見た（2:31–35）。

(2) 夢の具体的内容

a) 像は巨大で、恐ろしい姿であり、異常な輝きを放っていた（31 節）。

b) 像の頭は純金であった（32 節 a）。

c) 像の胸と両腕は銀であった（32 節 b）。

d) 像の腹とももは青銅であった（32 節 c）。

e) 像のすねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土であった（33 節）。

f) 一つの石が人手によらずに切り出され、像の鉄と粘土の足を打ち砕いた（34 節）。それから、鉄と粘土に加えて青銅も銀も金も、全てが砕け、跡形もなくなった（35 節 a）。

g) 像を打った石は、大きな山となって全土を覆った（35 節 b）。

2. ダニエルによる夢の解き明かし

(1) ダニエルがネブカドネツァルの夢を解き明かした。

(2) 像の各部分は、それぞれが地上に現れる異邦人の覇権国を象徴している。

a) 金の頭はネブカドネツァル自身、すなわちバビロン（新バビロニア帝国）を象徴している（37–38 節）。

b) 銀の胸と両腕は、バビロンの後に起こる、バビロンより劣る国を象徴している（39 節 a）。世界史的には、これはアケメネス朝ペルシャを指す。

c) 青銅の腹とももは、銀の国の後に起こる第三の国を象徴している（39 節 b）。世界史的には、これはギリシャ（マケドニア王国）を指す。

(3) 第 4 の王国

a) 像の各部に使われている金属は、頭から足に下るほど金属としての価値は下がっている。しかし、金属の強度は増している。

b) 鉄のすねは、鉄のように強い第 4 の王国を指す（40 節）。この国は、鉄のように、これまでの国々をすべて砕いてしまう。

c) 第 4 の王国が足、また足の指に分かれていることは、この王国が分裂することを象徴している（41–43 節）。この王国では、鉄のように強い人々と粘土のようにもろい人々が混在するようになる。

d) 歴史的には、ギリシャの次に登場する世界の覇権国はローマ帝国である。

- ローマ帝国は、鉄のように強い国であった。また、先に存在した 3 つのどの帝国よりも長く存続した[3]。
- しかし、この帝国は紀元 395 年に東西に分裂した[4]。
- この帝国は分裂し始めると、鉄が粘土と混ざらないように互いに団結することなく、分裂し続ける。（なお、7 章の幻と比較検討すると、10 の王国に分裂することになる。）

(4) 補足：第 4 の王国はローマ帝国か？

a) 第 4 の王国の始まりはローマ帝国と対応しているが、その後の状態は純粋なローマ帝国とは呼べない。

b) この王国はメシア的王国が到来するまで続く（次項参照）。また、ローマ帝国の影響は様々な文化面で現代にも残り続けている[5]。よって、将来ローマ帝国が復興すると考える者もいる[6]。

c) ローマ帝国の影響を色濃く受けた西洋世界を中心に、外交面では覇権主義や帝国主義が支配的となり、現在もその影響が残り続けている[7]。中川牧師は「この［第四の］帝国の本質は『帝国主義』」であると述べている[8]。

(5) 永遠に続く王国

a) 一つの石が人手によらずに山から切り出され、像を打ち砕いたのは、神ご自身の力によって異邦人王国が滅ぼされることを象徴している。

※なお、文脈的には滅ばされるのは第 4 の王国であるが、石が打ち砕いたのは「鉄と青銅と粘土と銀と金」であることが強調されている（35、45 節）。この第四の王国には、それまでの 3 つの王国の影響が残っている（黙 13:1–2；7 章の幻を扱う際に説明する）。

b) 異邦人王国を滅ぼすのは、神ご自身が起こされる一つの国である（44 節）。この国は永遠に続く。

c) 7 章（特に 7:13–14）との対応をふまえると、この国はメシアによる地上の王国である。

3. 異邦人王国の興亡：まとめ

(1) バビロン（新バビロニア帝国）

(2) ペルシャ（アケメネス朝ペルシャ）

(3) ギリシャ（マケドニア王国）

(4) 第 4 の王国（ローマ帝国以降）

(5) 神の王国

B. 異邦人王国と神の王国

1. 創世記 1:26–28 との関係

(1) 創世記 1:26–28 によれば、人は神のために＆神の代わりに地上を治める王として創造された。

(2) その役割は、人がサタンの誘惑に敗北し堕落したことで、実行不可能になってしまった。

(3) しかし、人に課せられたこの役割は生きている。だから、神は地上を治めるものとして様々な王国を起こされた。

2. 神の地上的王国が建てられることの必然性

(1) 神による統治の必要性

a) 人は、堕落した状態では完璧な統治を遂げることは不可能である。このことは、諸々の異邦人王国の状態から明らかである。

b) よって、完璧な統治が実現するためには、神ご自身による統治がなされる必要がある。

(2) 神であり人である存在による地上の統治の必要性

a) 創世記 1:26–28 で与えられた人の役割が成し遂げられなければ、サタンの妨害に神も敗北したことになってしまう。

b) 人の役割が成し遂げられるためには、神による地上の統治と同時に、人間自身による完璧な地上の統治が実現する必要がある。

c) 以上のことは、神であり人である存在が地上を統治することの必要性を示唆している。

d) イザヤ書 9:6–7 によれば、それを実現するのはダビデの子（人）であり、神でもあるメシアである。

(3) 結論：神が地上に置かれた異邦人王国の興亡から、神ご自身によって、メシアの地上的王国が建てられることの必然性を知ることができる。

II. 4 つの異邦人帝国と神の王国（2）（7 章）

A. 7 章の幻について

1. 4 つの異邦人王国に関する幻

(1) ダニエルは神から幻を与えられた。「バビロンの王ベルシャツァルの元年」（紀元前 553 年？）のことであった。

(2) 幻の内容は 2 章と同じく、4 つの異邦人王国に関するものであった。

a) 第 1 の幻：3 頭の獣の幻（2–6 節）

b) 第 2 の幻：第 4 の獣（7–8 節）

c) 第 3 の幻：天の法廷（9–12 節）

d) 第 4 の幻：御国の設立（13–14 節）[9]

(3) ダニエルは幻の意味がわからず悩み、おびえた。そこで、天使が幻の意味を解説した（15–28 節）。

2. 人の視点と神の視点

(1) ネブカドネツァル王の夢では、4 つの異邦人王国は輝く巨大な像であった。しかし、ダニエルが神から受けた幻では「大きな獣」である。

(2) 2 章と 7 章では、4 つの異邦人王国について「人間の目に見える諸国の栄光の姿と、神がご覧になられるときの諸国の横暴さが対比されて」いる[10]。

(3) また、神の視点から見れば、4 つの王国は「獣のような存在」に過ぎない[11]。7 章では、歴史に対する神の主権がさらに強調されている。

(4) さらに、7 章の結論では、地上における権威がイスラエルに与えられることが強調されている（27 節）。よって、7 章の幻は、4 つの王国に関して、御国の計画の鍵である御民イスラエルの視点から見たものであるといえる[12]。

B. ダニエルが見た 4 つの幻の解説

1. 第 1 の幻：3 頭の獣の幻（2–6 節）

(1) 第 1 の獣は獅子のようで、鷲の翼をつけていた（4 節）。これは新バビロニア帝国の象徴である。

(2) 第 2 の獣は熊に似ていた（5 節）。これはアケメネス朝ペルシャの象徴である。

(3) 第 3 の獣は豹のようであり、四つの翼と四つの頭を持っていた（6 節）。これはマケドニア王国に始まるギリシャの象徴である。

a) 聖書において「頭」は支配者や政府を象徴している[13]。

b) アレクサンドロス大王の死後、マケドニア王国は 4 つに分裂した[14]。

2. 第 2 の幻：第 4 の獣（7–8 節）

(1) 第 4 の獣は非常に強く、大きな鉄の牙と 10 本の角を持っていた（7 節）。

a) この獣は第 4 の王国を象徴している（23 節 a）。

b) この王国はまず「全土」を支配する（23 節 b）。

c) 次に、この王国は 10 の王国に分裂する（24 節 a）。

(2) 10 本の角の間から 1 本の小さな角が出てきて、初めの角のうち 3 本が引き抜かれた（8 節 a）。

a) 第 4 の王国が 10 の王国に分裂した後、もう一人の王が現れる（24 節 b）。

b) もう一人の王は、10 人の王のうち 3 人を打ち倒す（24 節 c）。

(3) 小さな角には人間の目のような目があり、大言壮語する口があった。

a) 第 4 の王国の最後に現れる王は、神に反抗し、聖徒たち（イスラエルの民）を迫害する（21–25 節 a）。

b) 王によるイスラエルの迫害は、「一時と二時と半時の間」（3 年半）続く（25 節 b）[15]。

c) この王は黙示録 13 章では「獣」と呼ばれ、キリスト教の伝統においては「反キリスト」と呼ばれる。以後、本講義では「反キリスト」と呼ぶ。

(4) まとめ：第 4 の王国の発展

a) ローマ帝国

b) 「全土」を治める統一王国（政府）？[16]

c) 10 の王国

d) 反キリストの王国

3. 第 3 の幻：天の法廷（9–12 節）

(1) 「年を経た方」による裁き

a) 「年を経た方」という表現は、この方の永遠性を強調している。

b) この方は神である。

c) 神はご自身の義に基づき、御怒りをもって横暴な異邦人諸国を裁かれる[17]。

(2) 第 4 の獣の滅び

a) 25、26 節と照らし合わせると、反キリストはイスラエルの迫害を始めてから 3 年半後に裁かれる。

b) 反キリストは滅ぼされ、燃える火に投げ込まれる（黙 19:20 参照）。

(3) 最初の 3 頭の獣について

a) 第 1〜3 の獣については「主権を奪われたが、定まった時期と季節まで、そのいのちは延ばされた」（12 節）。

b) ダニエル書では、「時」という概念は、多くの場合反キリストの破滅の時≒イスラエルの回復の時と関係している（8:19；9:27；11:36；12:13）。

c) バビロン、ペルシャ、ギリシャについては、覇権国としての力を失うが、その影響は反キリストの滅びの時まで残る[18]。

d) 黙示録 13:2 では、第 4 の獣について「豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった」といわれている。第 4 の王国には、最初の 3 つの王国の影響が残っている。

e) 3 つの王国は、それぞれ次の王国によって倒されるが、その影響は何らかの形で第 4 の王国まで残り続ける。しかし、第 4 の王国は神によって完全に滅ぼされる。

4. 第 4 の幻：御国の設立（13–14 節）

(1) 「人の子のような方」が「天の雲とともに来られた」（13 節）。

a) 「人の子」とは、人と同義語である。

b) 先の幻から続く文脈で考えれば、この方は神の法廷で裁きの対象ではないため、天的な存在である。

c) イエスはこの箇所との関連で、「人の子」をメシアの称号として用いられた。「そこでイエスは言われた。『わたしが、それです。あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。』」（マコ 14:62）

(2) 「人の子のような方」による御国の設立

a) 父なる神は、この方に御国を渡される。全ての民がこの方に仕えることになる。また、この国は滅びることがない（14 節）。

b) 27 節では、この御国がイスラエルの民に与えられると言われている。

(3) 「人の子のような方」による王国とは、メシアによる地上の王国のことである。

a) メシアは王であり、祭司である（詩篇 110 篇）。

b) メシアは神であり、人である（イザ 9:6–7 など）。

c) メシアはイスラエルを代表する人物である（イザ 49 章）。

d) よって、神からイスラエルのものである御国を渡される「人の子のような方」とは、メシアである。また、その御国はメシアの地上的王国である。

(4) 地上を治めるという人間本来の目的は、メシアの王国において実現を見る[19]。

a) 異邦人の王国が裁かれ、神の御国はイスラエルのメシアに渡される。

b) イスラエルは「祭司の王国」として回復させられる。

c) それによって、全世界がイスラエルの神を礼拝し、メシアの統治に仕えることになる。

d) これまで学んできた、イスラエルを軸とした御国の計画と合致している。

III. 反キリストの「型」：アンティオコス 4 世（8、11 章）

1. 8 章で語られているのは、第 2 の王国（ペルシャ）が第 3 の王国（ギリシャ）に取って代わられるという預言である。また、ギリシャから現れる一人の王がイスラエルを苦しめるという預言である。

a) イスラエルを苦しめる王とは、アンティオコス 4 世エピファネスである。彼はアレクサンドロス大王の死後にマケドニア王国から分裂した国々の内、セレウコス朝シリアの王であった（在位紀元前 175–163 年）。

b) アンティオコス 4 世はユダヤ人の上に圧政を敷いた。

c) アンティオコス 4 世は神殿の至聖所で、ギリシャの神ゼウスへのいけにえとして豚を捧げた[20]。この行為によって彼は神殿を汚し、イスラエルの神を冒涜した。

2. アンティオコス 4 世は反キリストの「型」（予型；type）である。

a) 7 章では、第 4 の王国から現れる反キリストが「一本の角」と呼ばれていた。

b) 8 章では、第 3 の王国から現れるアンティオコス 4 世が「もう一本の角」と呼ばれている（8:9）。

c) アンティオコス 4 世の性質と行為は、7 章で預言されていた反キリストの性質と行為を予表している。

3. 11:1–35 は、アレクサンドロス大王によるペルシャ陥落からアンティオコス 4 世の治世に関する詳細な預言となっている。
   a) 36 節以降は、ある王が自分をあらゆる神よりも高くするが、神の憤りによって滅ぼされるという預言である。
   b) 1–35 節が歴史的事実と合致しているのに対して、36 節以降はアンティオコス 4 世には該当しない（彼は異教の神々を礼拝していたが、36 節以降の王は自分を神々よりも上に置いている）。また、他に合致する歴史的人物も存在しない。
   c) 36 節からは、「型」であるアンティオコス 4 世の預言が、反キリストの預言へとシフトしている[21]。

4. 結論：反キリストは第 4 の王国から現れることが預言されていたが、「反キリストの行為については、すでにギリシヤ帝国にて現れ出たアンティオコス・エピファネスによって予め示されている」[22]。

IV. 患難期と死者の復活（12:1–3）

1. 大いなる患難（1 節 a）
   (1) 反キリストの迫害がもたらすイスラエルの苦難の激しさは、彼が滅ぼされるまでの 3 年半で頂点に達する（7:25；9:27；11:36–45）。
   (2) イスラエルは出エジプト以降、苦難の歴史を歩み続けてきた。しかし、反キリストの支配の最後の 3 年半は、イスラエルが国として歩み始めて以来、「かつてなかったほどの苦難の時」となる。
   (3) 3 年半の間で、天ではミカエル率いる天使たちと、サタンとの戦いがある（黙 12:7–9）。サタンは反キリストの力の源である（II テサ 2:9；黙 13:2）。
   (4) 地上で 3 年半が終わる前に、天では御使いたちがサタンに勝利する。ここに、地上の 3 年半の終わりに反キリストの軍勢が敗れるという希望がある。

2. イスラエルの救い（1 節 b）
   (1) イスラエルの苦難の時は、最後には彼らの救いに至る。

(2) 「あの書に記されている者」とは、信仰者を指す（詩 69:28；ピリ 4:3；黙 20:15）。
(3) 患難期の最後、イスラエルに残された信仰者たちは救われる。

3. 死者の復活（2–3 節）
   (1) 終末的な死者の復活は、旧約時代からあった信仰である（ヨブ 19:25–27；イザ 26:19）。
   (2) この預言は、死者の復活は患難期が終わった後であると教えている。
   (3) 復活するのは「多くの者」である。
   (4) ヘブル語の「多くの」（ラッビーム）は、「すべての」という意味で使われることが多い。よって、この箇所は、全ての人が復活するのだと教えている[23]。
   (5) 信者は「永遠のいのち」に、不信者は「恥辱と、永遠の嫌悪」に復活する。
   (6) 黙示録は、不信者の復活が、実際には御国が建てられてから 1,000 年後に起こることを明らかにしている（20:4–6；11–15）。

4. 結論：患難期は、イスラエルの救い、死者の復活、御国の設立に取って代わられる。

V. 回復までのプログラム（9 章）

1. これまで語られてきた内容、特にイスラエルの回復と反キリストの興亡に着目して、神のご計画のタイムラインが啓示される。
   (1) ここまで詳細な「預言的タイムライン」は、他に類を見ないものである。
   (2) さらにこのタイムラインは、患難期（主の日）のプロットにもなっている。
   (3) 詳細は次回学ぶ。

2. バビロン捕囚から帰還した民によってエルサレムが再建された後、メシアが来られる。しかし、メシアは死ぬ（25 節）。

3. メシアが死なれた後、時間を置いて反キリストが現れる（26–27 節 a）。

4. 反キリストはイスラエルを苦しめるが、遂には滅ぼされる（27 節 b）。

ダニエル書における御国の計画のまとめ

1. 神の御国が地上に建てられる前には、異邦人の王国による支配が続く。
2. 異邦人王国による支配の期間に、イスラエルは一度帰還し、エルサレムと神殿を建て直す。
3. その期間にメシアが来られるが、殺害される。
4. 最後の異邦人王国の王は、反キリストである。
5. イスラエルは、反キリストの統治下において大いなる患難を通過する。
6. 神は憤りをもって反キリストおよび彼の王国を滅ぼされる。
7. 神は最後に、メシアによる王国を地上にお建てになる。その時、イスラエルは回復させられる。

---

[1] 本講義は以下のテキストに基づく。Michael J. Vlach, *He Will Reign Forever: A Biblical Theology of the Kingdom of God* (Silverton, OR: Lampion Press, 2017), 207–19.

[2] Eugene H. Merrill によるダニエル書の神学の 3 要素（神の主権、堕落した人間の主権、神の普遍的主権の回復）を参考とした（“A Theology of Ezekiel and Daniel,” in *A Biblical Theology of the Old Testament*, ed. Roy B. Zuck [Chicago: Moody, 1991], Kindle ed., locations 9770ff）。Cf. Idem, *Everlasting Dominion: A Theology of the Old Testament* (Nashville, TN: B&H, 2006), 547–54.

[3] ローマ帝国は紀元前 146–紀元 476 年の 500 年以上、東ローマ帝国を考慮するならば紀元 1453 年と約 1000 年に渡って存在し続けた。なお、バビロンは 66 年（紀元前 605–539 年）、ペルシャは 208 年（539–331 年）、ギリシャは 185 年（紀元前 331–146？年）である（Leon Wood, *A Commentary on Daniel* [Grand Rapids, MI: Zondervan, 1973], 69）。

[4] Whitcomb や Rydelnik は、2 本の足がローマ帝国の東西分裂を象徴していると考えている。John C. Whitcomb, *Daniel*, Everyday Bible Commentary (Chicago: Moody, 1985), 53; Michael Rydelnik, "Daniel," in *The Moody Bible Commentary*, eds. Michael Rydelnik and Michael Vanlaningham (Chicago: Moody, 2014), 1287. (Cf. Arnold G. Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah: A Study of the Sequence of Prophetic Events*, rev. ed. [San Antonio, TX: Ariel Ministries, 2003], 24.)
　ただし、上記の解釈には異論もある。たとえば Miller は第四の王国がローマを指していることは認めつつも、「こういった特定は、テキストに明確には表されていない」として、Whitcomb らのような解釈を「疑わしいように思える」と批判している（Stephen R. Miller, *Daniel*, New American Commentary [Nashville, TN: B&H, 1994], 97; Cf. Wood, 69–70）。

[5] たとえば、オリヴィエ・パオシャー「ローマ帝国の遺産　ヨーロッパの法制度に影響を与え続けるローマ法」由比かおり訳、swissinfo.ch（2013 年 8 月 9 日）<https://www.swissinfo.ch/blueprint/servlet/page/jpn/ローマ帝国の遺産_ヨーロッパの法制度に影響を与え続けるローマ法/36614534>；2018 年 12 月 8 日閲覧。

[6] Rydelnik, 1287.

[7] 木谷勤『帝国主義と世界の一体化』（山川出版社、1997 年）。

[8] 中川健一『クレイ聖書解説コレクション「ダニエル書」』（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ出版部、2015 年、電子書籍版）における「7:7〜8『ダニエルが見た第二の幻』」より引用。

[9] 第 1〜3 の幻のタイトルについては、中川『1 日でわかる「千年王国論」』（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ出版部、2017 年）11–12 頁より引用した。

[10] 明石清正『聖書預言の旅』（リバイバル新聞社、2002 年）106 頁。

[11] 中川『ダニエル書』における「7:1〜3『ダニエルが見た幻』」より引用。

[12] Rydelnik, 1297. 「7 章は、異邦人の諸帝国をユダヤ人の視点から、凶暴で破壊的な獣として描いている。」

[13] Miller, 200. ダニ 2:38；イザ 7:8–9 参照。

[14] Ibid. 分裂後の各支配者は以下の通り。(1) カッサンドロス→ギリシャおよびマケドニア；(2) リュシマコス→トラキアおよび小アジアの大半；(3) セレウコス 1 世→シリア、バビロン、中東の大半→（4）プトレマイオス 1 世→エジプトおよびパレスチナ。

[15] Ibid., 214–15.

[16] Rydelnik, 1300. ただし、Miller（213）は 23 節を純粋にローマ帝国の描写として捉えている。

[17] Rydelnik, 1299.

[18] 中川『千年王国論』13 頁。

[19] ジョイス・G・ボールドウィン『ティンデル聖書注解　ダニエル書』伊藤僚訳（いのちのことば社、2007 年）170 頁。

[20] Rydelnik, 1301.

[21] この問題に関する詳細な議論については、Miller, 304–6 を参照のこと。

[22] 明石、111 頁。

[23] ボールドウィン、234 頁。ただし、語の第一義的意味から考えて、復活するのは文字通りの「多くの者」だと解釈することも当然可能である（Miller, 318）。John F. Walvoord は後者の解釈を採用し、患難期が終わった後に復活する者が「多く」であり全ての人ではないという事実が、患難期前携挙説と調和すると述べている（*Daniel: The Key to Prophetic Revelation* [Chicago: Moody, 1971], 290）。